玉淵集

五

特別
チ12
3643
45(5)

音曲玉淵集五

一ふしスヽ乃事

ふしゝ前のすぐ歌章ゝ伝是ゝ視ゝ　刈ま分下ル心ゝ階ゝ
光ヲ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

三　△式ゝ山すゝとさひしきさ

ウ　△秋九風ハふゝぬゝ

エ　△人ゝ一ゝ宮ゝ低ゝの宿ゝに

セ　△神ゝのゝおゝらゝゝ

オ　△爰ゝハ刈ゝさゝめゝよゝゝ

○一字ふし

カ　△光ゝをゝみゝるゝひゝる

セ　△野ゝもゝ原ゝゝと

○同ハ内ノ一字ふし

光ハ下音の内なり

光ハ下ル上のすぐ章ゝ息を引やうにして
次の下ル章を指く下ヘ一強くふしてハ不宜

△宵よぬきてゐるぬる

△みちのくのあさの

○二字歌一

△たゝひあき妻妃よかく

△氏物語の利生まて

○歌ス上一字留てすぐ必章モを右図の心佐島ヨ孤ハヘシ

△何と必中乃

△えさり先本位也

○三重歌一

△君か代ハ千まの松原

△うゑて孫ハ

先ハ一字留て上ヨ位つくと息ヤ上げて二字留て後のさ行章息も音も歌ス

△火宅を出に名ゆくなく

△たりひれ佐ものの

△対節も実と志きさり

△光乃名ハより乃

○行歌一

△初て重むをの光

○居ヘ歌ス示光ハ落ス章ヨリ佐島ヨ孤ハ中程ヨ必息の

起ル示ヱを押ヘ低て階のきさめと下ル如く下ヘシ

△まのヨ物ハふとたりてゐも角まと孫ちけハ乃

△かく年月を送る光ハ

○二字三字歌ハ示先息ト音トつれて下ヶ其次又息ヲ下ル

△面いせろハ夢をうゝ命

△世と乃里に名よゐく

△名も知て知さて川ヨ

△かれの名社ゐかれ

△ちゐりをこむへしと

ゐりノけヨリト音ヨあ又

ヱノ字息ヲさけへし

△名に月のまへのうゑ世

一一字にめ二字つめ乃事

花信書ニ一字にめて二字伸るを一字つめこゝひ三字はめく一字伸
ゐを二字つめて又三字なゝ乃みるすゞ又伸る心の矩に
たつを祝きゝ婚みるなり

揚 △かりよ人界に　ウヲ ツルル引

芝八二字つめて位　かゝと　ヨスルニ非ス

始 △たゝやかゝ木の　花始引　三 ツルル引

芝八一字詰て位　たゝ　ヨスルニ非ス

又白切のいひくかゝ　ヨ二字詰ていみりを

千 △今ハあつさう　ちゝ　ゐ　ひゝも

芝も引トよるゝは非ス　ゐ　ゐ　ゐ

初ハすく次ハかゝ上ケテ後ハ中きけの心上音ト音を　○入ニハ上ニテ入
下ハ濁ル　○又上ハ上下ニテ拍を是ハト音まを引也
秋津洲九国しめくゝ　　いたゞき角まを拍心をへ
芭　△見ぬそのふるさや　　仏
△仏乃ちかれ手本
綿　△実や流をてハかゝ中の　　舎
△月雪のふる松ち井ハ
なれてはいかゝ乃中や月雪れ
古き寺井ハかゝく西ハさん
る　△来れ雪夜のおきぬまを松風　　毛ハ中ニテ上ヘ高サズ
上ノ章ニ必すくと
ゆ　△をくれ乃ちも井をぬ　　毛ハ大ニテ
る　△思ひを乃ち井ちり井ちり　　毛ハすくニテ
曲章ノ中ニも同

定　△中こぬて　　音ハ拍を
廿　△父をかさりつゝ城ふくみて
る　△たまとゝ乃ちる
円　△末代のためしも
三　△ちんやれるの記きハ
ゆ　△国路乃名も声くに
ち　△りすを城をめく
円　△下化衆生の根を得ちり
日　△煩悩にくりとおそろに

此たゝひすくてハ熟ニ居ヲ之ろく止ヘニ
毛ハくりニテ
入ニテと角ヲ性ニ濁ルヘニ
毛ハニテ下ノハラ濁ク但濁ラ
ザル時ハ濁ラズ
毛ハそのゆ字濁ル不右円心
双ふニテとかろくニス
此たゝひ上ハちいさく入ニ
トハニテ高サと
右円
毛も中ニテと但上のろノ章
ゆハ別して熟ニ

右月たゝひのゝ字ウクハ弱

△いくへよきくハぬえれ声

毛ハ弱の掛よへけて上ス

△葉をうけ胡るゝ風よ

毛ハ弱して祢を弱

右月

△日もゆく末を久しき

△返る波れ浦よりて

一下ル ふ一乃事

胡 △よとのみ面月もゝ行ハまさをハつるもうん

中上ル 高ケ 高ケ 住ケ 呂 ヲトス

松 △村雨も社のゝ

胡 △後に残るその

イロヲ付てさるこ

松 △行ゝ年れ中納ゝ

毛 △ゝて後れあもそこる

中ゝさるこ

田 △清ちれたきつゝ

う △氣ハ下れは引ゝ

毛も中さけ

上の南うひくき

まてさるこ

チ △実や世の中ハ

ほ △安ふれ玉あれや

ほ △行ゝ末とつれなう

と △あるゝさるれ

ゝ

ゝ

ゝ

△いろやかた

一ノム章

△神とそてらの

△かゝるゝきハ

△おしなべてこゝ仏 上ヨリ云ぐす附ハノミタルトヲ義ス

△南をたゝく仏 トヨリ祝ゲてたゝ字分テ仏ハ義ス

△大きくノムこに

△白もゝをろくこと

△小く春こ

△三吉野の

△紅葉をたゝ

△入テノム

△折りよもすゝ

△裏ヨリ祝ふこ

△氏文ろこらくば

先ハノミ入ルヲ裏ヨリ祝ふこ

先ハ氏ヨリ出ス章ヲ裏ヨリ祝ふこ

一ノ氏章ハ陽息ヨリ陽息ヲ

△ゆ漂ひ文をそあ出せる

△恋やきこゝろも

一ノ氏章ハ陽息ヲ上ヘ南ヘ

△矢一ツ来つゝ

△拍すこれ泳谷やな

一かさあり章

氏章大ヶ下音ヨリ息をソト分ルヽ突ヘ
ヒヲつゝく出せば息もうん又ふる章ヨまよ

△形をけつまかせる水みち

△雪ひあつゆ

一ふり引

△何とたゝ

先ハ出ス章ヨまよ

見ハすく章ヲ出上ろこ

△花物ろ双蛾も

先も出ス章ヨまよ

△衣ハ玉ハよるかけ

少 △東山せあく

丁 △ちやくまく無人声

十二 △相人なり

多 △大天狗あり

る △尾上のもみぢくあり

宋 △月よなり

き △ちとせ公を敬くなり

わ △ちあ後せぬ客なり

る △南枝花初て咲く

志 △それハ老ら新

ら 此上音ニて拍子ハ少ハ

仁 △青苔乃地

右同

保 △紫雲のたなびく郭

此上ハ皆上音ニて拍子ハ引て引ク

但ヲサヘ句

△すゑ毎ひゝ名あり

此ハ下音ニて引て押句

新 △夏之も花を書ろあり

辛 △ちとり果て侍ふあり

も 八十かへ里ふる紅みちりけ

少 △ちゑをたしまぬ

上元 △ふゑ月をも

下ノ二つの章ちゝゞと又ふゑ

西 △あけをあく

せ △仏ハ名なるゝ

此押ハ章并下ノ下句の板ずるに有之張ニて拍子

之 △ちゑれちまさハらゝや

八 △ひまのよひさとち

ゆ 此ハ下音ニハルニまきゝハ

四ス章ニ同前ニ

ゆ 此ハ上音ニ引ハ引も押ハ臣

る △音ゑしほのみちひなれ

此ハ上音ニて拍子引て押ハ臣

其長ニて又下ノ字ニ少ハ臣

れ △かけハふるゝ

下ニ

ね △ふゑ月をも

下ノ二つの章ちゝゞと又ふゑ

西 △あけをあく

る △ころもよたゝ

此ハ上音ニ引下音ハ臣ニる場ニ

一ゆまぶし　ここ　式部元ヲ文　皆中音之

田　△月よりけ　ここ　　千　△ますれめや　ここ　式章吉

土　△おとのそれみとり　ここ　　ゆ　△みこのそへ　ここ

ゆ　△をへ姫しきこのみち　ここ　式ふも右ト日ゆをこそ侍る

南　△橋取不捨　ここ　　八ふり引まきこハ

もゆりこそ侍しに給

一中よゆる章　八ふに給

セイ　△二十五ノ　ここ

ト木ル　△ゆゆぬれそて　ここ

一たけくらへのゆ　　孔　△人ころや　ここ

式ハ　ハニ式章ノ心之

如して同しふれ四ハ皆たけくらへと姫よりり

軟　△黄くれ山くれ山とくまて　式ニハ　ゆりやうよ孔よ

鈴　△あひといふことも恨こといふことも恨なしひあしも

タ　△えーとすーとすーとしの多ものも香をも

達　△人さにまろきすり　式ノ所ノ章皆為て恋ふ

おりやうる拾を有へ

一三川乃　　先ハたけくらへ孔類之同しやうよ孔よ姫よ

楊　△をたにや六条のうんたいノかんをくれ

井　△たのむ仏乃みての糸

一三字ひぐり　　先ハ姫よりと

△うれひをかくるゝ式うこハ

△こまにたゝみ少ゝ時をや 吉

右同

△人を助るるさをのこ 吉

△足ハ式あらうよ位の高のあり ひゝハ

おもに名をあゝ人なり

羽もうやうの糸下まで三字

さるぼハ中まくゝ

先もきらふふゝ

はるとあるこハ悪たゝカゝず

字ヲ加てよの字ヲ引吉

先も右同公ひとあるこハ悪

先も三河引紙に物を字ヲ不加

一三字さゝり

△花見車ゝ物くゝより 吉

△足ハ式あらうよ位の高のあり ひゝハ

おもに名をあゝ人なり

一三河引

△こゝ物よあるゝ

△たゝひよ内外に

△まれこそ物の

△ゝり えゝ ゆ引 ゝ河てう南校ゝ

一序の三字の事

遊生ゝの三字ハかろく出すゝ

面くゆゝ先ハ悪先を序乃字をゝ

一字ハ清ぬやうよ口の内を強出ス

但一セイ高の乃りて知る所ハ意ゝ

△ゝ清やを面ゝ出砂ハ

△ゝあゝの高をゝてをゝ

△ゝゝ高ゝた一枚乃

△ゝゝ山てゝ式の

悪ゝを通ゝ故三河引 ゝゆ

悪ゝとかゝるつゝ

一文字送り

△ゝゝ先引音の字三河はきたゝ糸茶乃を表字

をすゝ結くゝ先をゝ元ゝ付を飛ゝ

△ゝゝせゝゝゝゝゝ夜の雨

△ゝゝゝゝゝゝゝゝのゝゝゝゝゝ

一初ろよ　ろ部

二字はくけてひろよハ悪し二字続けて仮名へ位ろくなる
きひろよて初ろ仮ト仮名へ文字多くハ悪し何程
ながき歌も二字ってと仮名へ

定　△ていかつ引ろ
訪　△ろくよハくと
玄　△双林の入滅ていくく
丹　△逆梯ひいろ
安　△ろくろれをろれろ

一ゑろよやうまてひろゑぬ
三　△すしひきおくて
一よすが　先第二字ってくまて

決　△うるすおれかも川る

江　△まくをおへ
天　△たもおれおへろ
右ひろよハ第ろ一字を初ろ引。ろるハ第ろ字仮名
角　△まえうくうてた
三　△ろれも不清ものもて
一たうぶ姫　先ハふしの名なり
モラ　へかとおくつのぶ

一文字ゑこひろ事

ゑふと人ハ耳ま入ハ都て悪し只双ま文字れおきてゆ
ゆやうまと仮名へ世文字ゑこひと三字とたくけんま耳
ま之也手意双ま文字れう程と仮得三字双ま耳ま
たては又ゑふまも三字ハ耳ま入れと思へ　但指ま乃ひき八名川
一恵ーて、トナ章ーロス　六九　一元　六ー　名れ手を急きんやく

元なるゆへ陰陽の文字うくゝ乾ハ陽九陽也
陰まて陽をたすゝ所也第一也

一ふる章〳〵　梅ノ枝〳〵梅ノ花〳〵

○フル章ハ梅ノ花ノ○ラス章ハ梅ノ花ニうらん　ヌ章ハ花を
すぐよふり出ス〳〵又梅ノ花ノ花ノ下ノ

夾 △まゝ実ノ色ノ　　清 △まゝ一門　　梅ノ枝ノ枝合ス
白ラ切まゝ花ノ枝合ス
三ツ地の文字ふ是
花の枝合ス
玉 △くゝ人ノ花ノ色ノ　　玉 △くゝやふるゝ
井 △うゝしまを　　井 △清く井角
高 △雲ハ小舟ノ浮て　　夾 △まゝに押ノ
百 △えいゝ〳〵えいさ　　百 △井ノ里ハ
右ノ枝ノ枝合ス
梅ノ枝ノ枝合ス
右ノ枝ノ枝合ス
梅ノ枝ノ枝合ス

百 △たゝろ乃
高 △炉乃出ハ〳〵ろ
田 △風乃ゝなる
百 △ふりかゝくも
高 △心を友や
千 △清ハ〳〵ゝをきふに
百 △うゝれゝ人ハ
夾 △あゝを〳〵ハ
田 △地ハ〳〵ゝの
卒 △ゝやうゝよハ
ゆ △さゝゝぬ列ハ
遊 △ふゝ内乃ハ情や
梅ノ枝ノ枝合ス
右ノ枝
梅ノ枝ノ枝合ス
梅ノ枝ノ枝合ス
梅ノ枝ノ枝合ス
梅ノ枝ノ枝合ス

一フルトラストの巻ハ章

百 △たきゝれく
傳 △ちゝをふ
百 △父大ハ
姓 △こゝの秋風
梅ノ枝ノ枝合ス但ハラ条ノ下ノ下ノ下ノ下ノ
梅ノ枝ノ枝合ス
梅ノ枝ノ枝合ス
梅ノ枝ノ枝合ス
梅ノ枝ノ枝合ス

田 △今ハ何をか　る　△むかしまこと

一ヲス章　フルシス板本ハ元別あり　フル章のおもかけ抱よりらず　元そも抱よ　金示の事

る　△こゝ俗の浦ハ元にゝり

△年羽ハと　△秋乃むしれ

△立ハ分ケれ胡々に　△末代のため

楊　△又ハ一まに只をゝり　ゆの章フレぐ抱よおぐこ　ヲス章まそ抱ヲさぐるゝ吉

田　△見ハ流きたる清水れ　セミ　△新も扇とまそ〳〵ある

同　△大些れ気を有ときき　ハたゝひハ抱ヲすくるまてヲ　あれこ

右　△うらふきを見れ指ハ　紐　△ひまく照れ日ケかゝく

キリハ有ハ大くさヲス章こ　たゝくハうもこ

志　△年波ぬるゝハ　先ハ抱ハ有ハ本こ

田　△ゑ沼の水ハ　辛　△新れ丸ゝくくゝ

一前をゝ乃事　古書ハも有

二　△祢もせぬゆめと　先を前をゝとゝハ祢ノ字の章を押

前ヲ　もノ字の章を只ゝ　ぐ俗ハ公あり前の祢ノ字まそ祢ゆ

前をゝとゝハたゝれこ抱ハあひなまるこ

巳　△金氏の文さに　宋　△非本と異ハ所こるゝ

一白聲れ事

志ゝ乃声ハ声ハとゝはれこゝ　城

こゝ俗ハ志りて以ハ人ハ人なゝ

春風や月は夜くもりけよろつゝは
きゝ〳〵ゑ有りとこたらひ紅色〳〵
六章まて考へ〳〵　融のきれをみまも　色も白声元

一曲を忘れて拍子とれ拍子はかまた曲を知といふ
三　△今たりひねの爰たまも　洞元　後の集ともの字の引位の
ちゝあやうう拍子をえへ〳〵
七　△名残おゝ〳〵乃ぢや　ゐたむ〳〵　後の集　きりくすの
曲を祝ふ示
来　△首のかゝ〳〵をつよゝれと笑ひて　笑ひての所拍子をやうて
うま

一ちゝ〳〵拍子乃不声をちりあるハ悪〳〵
ゐ　△あゝ〳〵かこうたゝ〳〵めやゆふやな情じへ〳〵く
帝七年の初かやうに拍のちゝ帝之ちゝたゝてゝ

一拍子髪上りよりは安元乃の
地　△法乃をゝへ　法ヨリ法て刹を　法ハ法又法ハ様の声ハそハ元し
又功者をまてし入ハ悪〳〵
井　△ちゝのゝり平の　元ハ者ちゝりヨリ　△たゆ知さいを　いさトウクハ弘
ウクユハ甲ル
色　△月ハさろゞ　乃くちゆうく悪　△かくて知に　ざくちゆうく元
甲ル
三　△ちゝくめ乃ちゝと　元ハ者トクリテくモこモさけす　てノ章さけす
知ト又ハル元甲ル
元ハ者トクリテくモこモさけす
うちふ元知きヨリ甲ルと

一イロのゝ　ちゝト羽トまゝ　ハ元ハ
来　△能宝寺教経寄ふやう　地　中イロ　△クゝれ乃雲のちゝてに　羽
ウ　△氏河ゐにちゝとちゝて　詳　イロ　△いゝにあまゝ嫌へ　羽

一次第乃事

先ヰ紙の筆ハ後言なまは吟強く進む位也始終たるみなしやうまぬ〳〵次第の思ひ切ハ白次の如く有〳〵乃ち次第ハ位大概遠ノ和なり

△今筆始めの藤衣　いたづらハ乃ノ字ノ章下ル故ニ藤衣ヨリ又ハ心　根えびころもノ

ヒノ字ノ章下ルと先ハ思ひの今ノハノ章下ル有ニ成ル

ヨトル定例ニ

△年立海ノ事なれや　はたづらは字上テ巳ス有ルノ字又ハ心　根なれやノヤノ章ニ有ル

先ハ思ひの年ノヒノ字ハル有ニ成縁ニ有ル先次第ノ定例ニ

△風も静ニ有ル乃ハ　はつこひノ字ヨリハルヤノヨ

有ハ思ひ有ル有ニ成ノ字ヨリ又ハ心

△ひなれ初路なて事ハく　先も路ノ字ウクハ恋ノ字ヨリ又ハル心

思ノ字ヨリ又ハル心

△日も行末と久しき　しノ字ヨ拾て。ハひくきヨ拾ニ

又一流ニ。ノ字ヨラウ乃ハ行末ノ字ヨリ又ハル心

教定ニ成ニ其一流の格拾へ

○一流ニ行ノ次第行ハ次第とハ不用ニ成也

次第ハ其思ひ立一番ハ余情をハなり

一名所乃事

ヰ紙名所ゆうよすむ也名所出ル　ウイロヲ付ル

△そもく是ハ南今ニ住へ有ル所ニ付

次第なハ大ニヰ草ハ草の大ニとハ真の大ニより悪し

次第ハ有きハ柿とハ事ハ先ハト名所出スなり

むかゝを分てゝひ出すべしさかゝれた祇のまゝ遠乃
やうゝゆめ也也ゝて名案ゝかすり抱きハゆふゝて
板屋士ゝ彼天彼ゝの如きもき名案ハ文句を考へ
仕切をして祇へたゝあゝれたゝ口掛ゝに遊ゝ
むゝ立祥（タツハイ）の示ゝめゝゝなゝぬやうに又ゝとゝくしく
をなゝやうゝ有へ大ゝ男ワキ（侍）人夢ゝ伏位俗（位倡）
法ゝうゝ俗皆ゝれくゝゝ弱ゝ

松風世乃文句の口キ名案ゝてきゝゝ世ゝ雲ゝ素祇ゝ名ゝ
セリフハ祇ゝトゝ文ゝへゝゝゝセリフゝゝ去へ

一セイゝて出るワキのゝ
をゝやゝに進む也（ワキノセイハ男セヨリ祇出ス）名案ハ大ゝゝ名案也
羽
△風をやゝゝ三角乃浦ゝまゝ（後）△ゝゝやゝゝ乃ゝ也ゝ

一道行乃事
△第ゝ此ゝ位をたゝへぬやうゝ祇へ位次者ゝより女
かゝきゝゝ也ゝ歩行乃祇乃より起ゝ乃ゝ也ゝ初の
一ゝきりハゝゝゝゝりて祇ゝ切ての投ゝ抜ゝ也席ノ二字
強く出すゝ又祇ゝ出れ二字めゝゝゝと又ゝゝすゝてハルと
の分ゝ根ゝたゝきやうゝ有へ
△ゆめゝ孫ゝく（アリ、アリ）（章ハ二字目ヲすぐるゝゝ又流ゝゝ二ゝ
ゝけてもゝん祇やうハ目ゝなり）
る△たゝひゝ祇も（氏たゝひハ二字目より八ル）
世格ハ小祇神義ゝ目ゝゝ長ゝるゝ有ゝゝ
○乃行の角ゝ一白待ゝ示たつゝ上ゝまゝうゝふゝゝ知ゝ
朔△牧ゝ行末ハゝゝみゝ山河（一引）ひゝの（江）△ゝゝの川ゝ行末ハゝゝ（一引）

○ヰ切の名すうたひよハヲクリの名の如くすして遥出て吉
胡 △うちあて（ニヰ切）まよ伊吹乃　ヰよす佩のあふき拍子あれ
ヲ口キハ先かとよ
○乃行の末百首句を切ホ必下ル章のよ　待謡も同格
あ △敷妙空も迷つくや（先下ル）定格　江 △松乃名ゆれ波をすゝ
先和ゝゝ姿ハ一字下ルたゆきハ二字下ル定例と
さ △是もみやこゝはのくゝふ乃　ヲ △月ハかすむやみのをゝ
○乃行よヰ英まづきトゝ　先を英ゝ乃行つゝあたりもよ
ら △ゝ砂乃浦よ英たゝりか英　アリ △里近けあるかゝの声まづき
一口半名系セリフ色てサシの事
先ハ皆さゝ声とのゝ公ゝてハゆゝれて無勿論敬シ

謡てうふすもかゝれて英答と
世 △ゝれ式表よまてみまは　社 △きこや光信てまゝん
一シテ一セイ出端
服能ハ表ニよ乃りて出ル英ホハ英祇の信ニシ考ヘ
板素謡かとに必口キの祇よを謡て祇出す九甲名ル
なりシテハ改てよき比に祇よ出すへ
△尾上ハ名も引くくなり　世フリ引陽色よ引へ
佐色ゝれて末下ゝまゝて無起ゝて一セイ同しくサシ
声ハ名ホ上遠ハふゝもふくゝ知やうにくくゝ
遥よへ一二句ハ口ましてもゝ無ゝ祇ゝん

○竹生島などハサシまて出さしてこと如へ

○北斗まて出ること ○他国抱の内より居れること 楊貴妃 安達原

○舞臺へ出て度〳〵ていふこと三井寺 ○橋てまより祝て

出るこあり也 せいこ千 皆それくゝ乃公抱有へ

●サシの内ワヨウなよ多くこと云〳〵 仕舞なも式例こ

表 △白鬼の言ハつめきとも 式たゝひハトヨリ三字月角リ下

の名こそれヲ少ウ〳〵花然世未日例

白 △かくやと思ひ出ること 田 △三十三分の秋の月

五 △ひとへよ角社の声少へなり 系 △ハみ〳〵きたよりてなり

ゟ △松風をのこ少なれく 式たゝひハトヨリ世字月角リ下

十二 △高うたてゝ式日のかれ

志 △初角よさへきゝる角なこのまへ

玉 △何めもまるやこのゝ角れ

△けハみゝりにうゝひて

式たゝひハトヨリ五字月角リこけこ

△名のこ何角乃く系ゝて

一サシの末切よかゝ如下音まそ祝へも陽息こ引こ

る △思ひを乃ゝる斗なり

三 △つきぬや法の声かゝん

式ゝ乃ふ〳〵シ分ル

ハ○コ 変シ伝息こ祝へ

一下ゝれ下初ヨリ引ツゝりの事也ハハやゝ限こ乃乃公有へ

一上ゝ小謡序の二字れゝハ乃乃下こ祝ス同前

△ところハる砂乃 式引居の二字辰巳上リこ乃ゝぬやうこ

まツすくこ引へ

引居れ引きの乃ことあを古にをけ
初心のひくきハたちの初らと
○小祇乃返しれ不つまをけハたをたりよ遠ノせ太夫体ム
なり物るヲ羽衣の口キ表をせみ丸後変のヤスヨリあとの
たゝひ体むハ僻事也体ムハを夫斗なり
る△命かゝへて　式をぬる章ハ粗く息を分ル之物るヲ二つ
二ツ式祇てハをぬる章のるこかし　ヒッ息ヲひゝへて
出し分ヘしトヲたゝく突出をはゝやし
○手切ル小遠ちきゝぬ小祇とゝよるを中ノ手切の事之
か北よ出ルハ手切ル引立て出ルハ手きゝぬ他法なり

る△命かゝへて切　仗ゝう返カ北
井△秋乃そゝヤシハ　松乃声上
安△松を立出てヤ　是ヤ此
北△恋ふれ羽衣切　きてしも
セ△衣乃玉ハもうけしヤシハ　まれ

一作者よりてあゝす
花信セニ　太夫より祇よをめゝしてうたよへしつけ合し
うゝひ出ルを中文字一列うま分祇をゝく付るなりを夫
と同しやうに祇ひ出し分をゝんとたりへゝ遠出しをろハぬ
初ゝり付あひゝうふも一列口まて祇ハ根よやのゝやうに
無しなむ他しりを夫ゝりをゝく遠ひ出すすると
を祇辱ゝりたゝひを夫下よまてつま上よあをゝも
ゝ夫へ付へしトを　想してたれ一人うたよ示ハ味ひ

かまへ紀事所ゝくさとまと孤ふへ〜シテニ准へるごりん
ゆ未製ん動をなり但一せいの二ノ白ハ席の用ゐれ
えふ〜ッ條相ゆは有へうゝん付合のゆきとへた
△松ハすう〜きをそれも三人かの行ゑ〜ゆもノもノゆ
を引ゆ彼ノかノゆッ聲ゆきゆゆうまと引て出
すハ未製ゆゆのえゝと、ノゆッシヤント切て芳乃白切
めことくゐを切てかノゆをも引ず一人孤ふやう
ようたへえかるんきるふなり後りうかひをゆ後ゆ
付ゆ方ゆりゆく付ゆは菊角きろ代枝ゆ〜ゆ
くくゆゆ紀やうゆ〜てうかひ後ハシテノ孤ッ
元入て耳ゆてうゆふへ〜ゆ也〜て一人孤ふゆうゆ

むつ〜きゆなり

一呼ゆけゆて出ゆゆ
口キ後ひくゆ乃ゆハ悪〜素孤ゆ〜ゆ其後孤
出すへ〜　△ゆふくゆ初ハもくゆはつむへ〜後の
喃ノゆゆのゆけゆうちゆ中ッリあれゆと出すへ〜

一同答乃事
口キハ声を主とす風ホゆ〜ゆを夫ハ音を主とすゆホ
ほ〜先後陽ゆ芳別なり口キハ陽シテハ後ゆれゆ
ゆ夫乃方ハうつゆゆきゆやうたゆ口キハかろくゆうゆ
て孤ふへ〜但シテゆも弁ゆ或ゆ異ゆとゆうまゆ
ゆきくゆ相違を考ふゆ〜

○如〜て能〜て歩こ〜くるの所ハ羽まてもかゝる氣味
を素讀まても其公は有へし　先そめ羽の内ハや
くと心ひとゝ家さを　後元へし　但それもろねけあき
やうの待後へ〜うまぬくハ一字たく　おして後ス
公は後元こハ文字ま分かけくうけり次第よつめ
今一句意に沿てハうひよ一字てうけて後元たまる
やうますへし　但文字数すくあく後す所ハ文字めつ
まぬやうにろひくと後へし
仍△さそろ　△さそろ　花ろノ如し　又
上元△早うはゝ沿ある　かやうの所ワキより勢めす
沙汰乃かきりなり如〜て三へ位吟ま〜て後ス

有まくゝ勿論教のヲトス不修く孤ハへし凡ハ別して
如〜　△ふうくさゝよ　はよノ字まか公を
右内公
○向答の内羽ゝりふ〜ようつ風不羽をいひて古の上二文
字を重かへて祇出さるを必ゝ後
△ふうさ人ゝ家も又。栖ハ　傷△玉元弁元出て。ゝゝ
○ゝ〜より羽ようはゝも内公
江△かまの家ハ羽公ゝ　初△ひゆりんよあ羽異ゝ
○立居行かへまの不他を所ハ其公はしてかろシ必へし
礼△武方へ元入ゝ。　乾元平為元　杜△ゝ〜ま〜ま〜へし。ゝ〜ゝ
サへこゝろへ元入ゝ。　中ゝ〜ま〜ま〜へて

○ふーのかけ合後ーロかゝ文字をちがへて後すべーかろ
ら女ちゝハ行ゆ共公ゆ有ゝ或ハ文字ようりゆ
を添うつるやうまて後ー詰元方もうつして詰元
ゝまにめ氏あ也ゆ問答謎よくゆメても面白きゝ
芭 ○つちもくさ木も面よりくるーしうゝの表ゝを
羽れ共ちゝぬ有情也ーものつゝ
○哀ーてシテより早キハかすむゝ公よ孤ゝへーツレも同お
勿論声ゆ援豎お遠ーてハゆメふくきあゝやかく
姫後ちゝぬけかく序後ゑ彩ゑ
○同音へ後すゑ中音まて後スもあれた大根ハ呂まて
後ゆウクハ哀ーー字二字下音よりて後す所

板ゆよ共ゆ下かく初公ハ必ウク也
巧 ○ゆらゆ千家ゆ彩ゑよ 井 ○むーーおとこ乃
定 ○わかーに
杜 ○今ちてよ 南 ○三川もなき
○ひさくゝ乃

世たゝ公ゆ同音へ後ー方ゆ也く引て後す所ウクゝ三
ちかへゆ千まて後すべーー同音をたやく詰元へきゝ
引公よ詰ゆへ另ゆけよ後ありー

一初後の同音ハ也雑よ依て迷迷ゆれも先大概ゆ
ゆゝゝ概問答の末ハ後ゝはまる所共飛お意よ多ノ
位よ後声も豎ゆ声ゆ後ゆを同音それを詰てハ甲

ゐるこ同音ハ撥乃声よりなれとそ〳〵て結へ〳〵又同音祇
出す二字目先こ字目よりキ上ルあるところを押へ濁ル
有へ〳〵却〳〵て同音ハ撥乃声をもた濁ゝへ〳〵撥ハ
ハ亦こう法度安〳〵異ハ初ハうつり那〳〵

一祇函よるふ〳〵　なり小祇詣祇笛

こ〳〵ハすぐハ上ヲ先よるふる　こ〳〵下ハ濁ハ押ル三テ二字ハ作る

○ちれ　○なり　○ちり　○なり　○さよ　○ませ　○やん

○きん　○きれ　○ゝり　○ゝる　○まど　○たり　○たや

○ろや　○ゝや　○しや　○すぐや　○すろ　○ゝり　○すん

○ゝるん　○ゝるん　お杭のたゝひすく下ル先ゐき

ゆゝよみしの社会ちれく

△法行会常と成よりかく　志△たゝへそのたとゝかく

大ゝこすく章よ成安〳〵

、詩章をたゝ〳〵　撥初類行文ふ　初祇笛ハか白ゐ有

ゐ吉引付ハゝふ〳〵かゝ〳〵ん

一ふゝの撥出〳〵ハゝるゝとゝみ出〳〵下音よりかて

吉河ゐゐ仏有へ〳〵

一くゝど祇ハ序の位こ乱ゝてゐる糸をゝく如〳〵といふ文字ゐも

ふゝを使分濁ゝかゝ祇やうゐ行苗ゐやうよ那ゐ〳〵

声出ゝ文字扱ひゐ祇ハ悪〳〵板又ゝを祇ハ下音撥

成初ゆへ語ゝ安きこゝひハゝ仏の仏行ゐ要こ文くこと

祇ともに呂へ為すふ〳〵次ハ必かゝく出す〳〵ゝく

きもくハ長文句を見合せ仕切くそて吉たゆけ
まは村雲まるおと句切長を情て切情て出すへ
一盤久おとの後文乃新ハ句まるを後へ　きるきハ字よ
くルル気味あきはまく如之仕掛よ有ホハ各別
一語乃事　きもくるを文句を考お無よ語へ
○ミテの語りハ上より出　甲しるこ
○口キの語ハ乙より語出シ甲しるこよ語る　古書ニ
初ハ句切もゆるくと長縄　むいひそかし　を捨
ずかをりハ上てかする不とをてよ仮ホもを
見ハ名茶語句ともに文句短き所とるる也家ハ
と性よ不ハ定まれ文句を又各考へ　勿論

長き語ハ折し仕切をて語へ　必口掛よ延し
はまるるを通ることもき曲舞よ上掛ニ所ある
ホ　或ハ出家ル後後合仏ホまも仏を心て口拍
まよ延れぬるよ悟むるあり
○度義をて乃語ハ口キ方の貴族之是語ハかる
とりめ　違ふとは吟よ合へ又語りと好まれてハ
ホ　ホハ語るかるも才一芸有席乃相
意さ　合文句を考へ
一是乃いひそぬうちへ受て孤ホ
三　月まかひハさえぬ　一字程内へ　やあく　入て出す
ア　みるめをいそやらまよ　口キ　ちくく

今ハ　なむ仏ーシテ　なむくとの
一乃川との事　　海流之事に祇
○シテノ川とハあ尋ー　雨月護法ホ也乃川とヲ
上ゑと神祇ちの事別分る
○四ノ乃川と真よ花やうに有ー　すーめ乃祝
祈念の祝ゑ物をへー
一祈乃事
○葵上祝る谷行　祝伏弓家　それくよゑ物へー
一ちり乃お同音ちり　ちりもれ服能ちゆ　ちとハ位進
むへー　たるむハ恐ー
一ちりの事　たちりとてゆすをこテー同音ノ今ち

かてゑたゆ事別を　概ちり上てゑ祝ゑにちゑ位へ
きッちり上てるまてちゑ　ちるまてゆ　おと
○上てゑハ同音の不ハ　ゆゑ一人　宿ふハまゆり
○下かてゑハ一人まゆり同音の不ハ　ゆりもまユリも
有　位也も定格を
○ゆユリまユリともよ　祝言ト　かづれゆまうけ　有とゆ
高世ハそれよかりん
一さーー乃事　　さーハ滝のかーとゆ
○鼓打上ゑーてサシ　祝ひ出すちゆり乃内よ　鼓打上
所とゆり　仕ゑく打上ると　ゑ別を
○ちりまてハ一位　祝よもちく　位に同音上づりて　ゆを

海すをそれと捨てウカラ祝世は辰巳よりよ海ちゃ
サくまて能比よ祝よをえ元まにへ　洗ハすうそひよふか
○さ一ハ吉の掛ひ祝くてひらふ乃うち皇筋の要り
まて長を切下音よ必てハ文字ハ訪ふ祝へ　想てさ一
ハ文字をこひ所さやうに白切長次せりうんの乃ひや
かに祝へ　又音内一の内下ハ章字毎よがくと
下ふもゆふく
○初より下音まて出るさ一ハ白髮二人勢之
○さ一の下ちたぬ不必為ふまて浮祝よまぬす
△たそろくへ一や爰の世と　乃」ちとつ不ウク故也
又世と　二字ふせてウク故之二度よさぐる心吉又文字ふる

如くよ一撥に為ふもゆふく　仏下音よ為一て祝ふる
よ伝てウクと下ちまぬくうふ毎やうに公切白を切く
出ふ所　祝なくそふれと祝く祝へ　余も氏格
百
△実世の中ハあと浪れれ　氏中ハのハ章ふあ為
下ふくうクと　ハ実ヲ入て実へ一　かれの不ハ文字ふうク抜
もかまはんうふ毎やうよ押へ白を切　ちふへをヨリ祝く
○内一の内同音乃不よハ儿ふを不乃りて祝ふす　初心の
毛ふり仏乃ふ不ハふ　一の末ハ切の為ハ早掛ふこう所
故祝を其気味ふを古ふき所よて京ふ風ハ行ふて
仍
△ちふふのいと引ふる
千
△いく田乃川よ
ヨ
△ぎちーう祝ハ
ち
△ぎそけき表の　古氏ハ儿ハ
先一

○敍の内ハ君臣乃役を重うるゆゑ異ひ合さ
所故將くとゆ伝へハ仮さ〜まあんとかゝるゆゑ祝ひ
やうもおやうもを見サこの多ひと
ハ〜ゝ声やさ〜しとまても敍をは
拵ま〜知とやを異ハへきなり
○さ〜の末おかよかゝ所まへきちきし〜ゆに向く祝
へ〜ゝ〜ゝ「ハ」ハ所ゆヲ切て異章 呂よとゝもへ〜
一ハ〜ゝをて上ゆを生者ひより乃ア与ハ兎こ必長次上ゆへ
きゝく必こ敍も拵ゝて家ゆ与ハ未熟あり
少へ見皆世上れ有さ風なり 上ゆ 下ゆ 祝ゝへひ〜
忠へ祝ゝく見をさんを 上ゆ 下ゆ ゝ〜ハ表永の

一曲章乃事　をまひハよどみのかゝ〜とゆ
○先序の二字ゝゝく生すへし　おりけまとを長をゝゝみ
末まてひくくこ仮ゝゝするよハ祝ス
○二字語を白切れ、ひくかし〜を二字続つもるよる
仮、ひをかし〜よ語らられぬ不ハひ生ス　二字つもるこ
○文字を重ねへゝゝやう猶ハ絶よみを婦みの也
仮見ハ也〜て曲章よ清ゝ所ゝくと一字ゝ〜突生す
やうよ祝類もあ〜ゝ見ゝと
○曲章祝生〜ゝ初のよ婦遣ハ序　足ミモ序敍忘の心
ゝ〜めゝ上婦ゝ初れよを遣ハ敍　太日心
仮上婦一ゝ見ハ中の切遣ヲ序ゝれヨリ上を遣ヲ敍ト

後の上場より急ぎまてハ　急　日序破急の心
合せて九段是程に心を付る事肝要のよし
序ハ三段破ハ四段ハ三段の心得を
急ハ序破ハ四段有へし
○花傳ニ　上場二段ありて曲舞是を二段曲舞と云也
き曲舞ハ是を和と云云細ハ也切曲舞を祝ひハ村
有ものもをあらせまきあに上場を二段定め
ぬを試定規ハ曲舞ハ位をひくめそしめ
上場をおり　後の上場ハかろく上ろ是も陰陽
乃心也地別上場ハ位和乃字二段ハ段をろく
と上ケ後乃字引ッそなりを移く地へ移す事是

ぬひ有り上場をろうれを地まてもおろうく　ぬひ
云心掛肝要也但り地祝むさと早く　ぬぐくと又
上場まて押へ位し　上場を一大事と為ぬへく
地別乃位に皆知むさと　たろあるぬ有り
○二段曲舞ハ位つまりろうあなり心位をへし
○立曲舞を指し　居ろせまひハ静と是大事なり
又上場より立もをゆやかとハ立ちく器の雲と云
ちり立又床ハ腰ろ所も有かけかく　仕舞の
有と是皆それくよ位を所へし
○居曲舞まても舞ハ門皇帝　ハ上場を四方
上ケ安宅板待なとハつを設上ろとかやう乃たろひを

閑なるもちりまとゝえへし　決に個なとハ酒あなれハ
行ん程ゝ能へし
○上端の第一ゝきりハふしも拍よと拵て小節く祝へし
又とゝヨリ乃まて出る時日音ヰ切れ如く勢めて二字
引居ゆゝイカ、一字ヨリめあらひ末一字まて引へし
○上端の第ハ日音大ゝと下ゝきとそれを拵て祝へと上端
し入れあり声を元亜してとへし　位きゝらく祝みヲ
あゝ風ハ行ん悪し
○上端乃拵ハ急れ位ハ敬る遊まあるうる又後も遊
ゆやうよんはへし　位たるしハ泊ゆの張りと
○曲舞乃末ト音ハ不白切の第ヨノム章一所を出ふ

文字の内下ル章ハ多あゝうゝとなるくハすくめも有
井　ハ井筒乃をとなるも
ハ例しあきあを釈とるの
実　ハとうなれ奇なるは
ハ法のこゝろも
楊　ハそれ迷もろれえぬ
ハこひ乃せあれも
○曲舞の第呂へ第ゝと第ゝぬゝの第ゝ
ハ時節も変とゝゝまゝう
呂へおゝす
ハ祝ゝゝ
ハ呂へ第ゝん
○曲舞ハ所ゝ第すへぬゝあとゝよゝ
ハ切ハすへ除第ゝ
○曲舞とて切ト音まて分ゝ祝を先をすゝの曲とゝ

宋
△とてもきわすれめや　　紅ハかくて吋刻も
○曲舞にて其侍まひまく物ゑ右づきたばきゝてゝ
く△こゝろこゝろひハ月を　　楊ハ此うかの曲
　　光ヲ右左ゑ物
一論義入事　　こゝハ真ニ此ハ草と
くせまひまりハ引立て陽ゑ祝へ〜日音たゝみてそこゝ
味ひを考ゑものなり年竟曲年乃つけあと母へ〜
こゝハゆうくと移る地へ後ル所がうれやたかゝく
後すへ〜呂まて後ルハ悪〜　秘こゝ　ゝめより指ゑ
家色てハ未ゑくゝもぬけ物あなり遥生〜ハ公ゝりこ
指ゑを指てあまりひッゝらゝび祝生〜中後ゆッうと

曲を行せ指を拍引つけ公ニッゝゑ祝ひ此へ後〜ハ
ゝらくと後すへ〜仏ゝゝれを後白つゝゝるゑ色
開く心ゆへ〜　論義ハ後君まて教長ゆへたくみゑ
足後分祝を中ゑ合ル有り又二所ゑ後ンきあ〜ハ
後のハ物ゑ指ゑ風へ〜
○論義の内こゝ下まそ後〜　後ゑ不ゝこゝをゝんきル
曲と物ゑ後きゑゝ紅をゝくゝ後へをすきれ風
ゑなびくゝ妙〜とハ角り前ハ大きゑいひゝみてゝ
そかゝうぶ公ゝり
市△家こゝやくゝ実家教ゝれ　末へゝくさゝりくゝ末ゝれ
末ヲカ△ゝゝれ後ゑくゝ　セハ△有ゝゝゝやくゝ

御家こしをやすくゆのうて大すなれ
そうみこうるゝ稽を初ゝをや
うんきをはをまえ[illegible]ハきぶようち
地をきくさうんまるに寄へし

一中入乃事

楽屋へ入を悔り物の内へ入を神ごとよりらい序を
へも有其外ゝ殺さ風くをそれくれ位を考へし

一待謠　乃の謠ゝ

○神を待乃ハ謠ハ進ム心大格此強し
○菩薩精霊等ヲ待ハ閑ゝつよきも和も有
○幽霊を待乃ハ謠ハ哀れなり

○能ゝ立て謠ハ[illegible]たひ出しーの意ゝ寄切て謠ふ
ゝ寄きゝ[illegible]ハ但ゝ[illegible]ハ寄切ゝ[illegible]くすく謠ふ
○言砂　三輪　松塩　巫小町乃たゝひハ別公有に依
て常ゝ謠謠ゝうすむ公あり
○乃乃謠を謠ひ下音ゝて謠ふ不ゝハ引ゝて不謠一ゝき
ゝ寄せて謠ひ出ス也　ワキノ謠出ーハ男ゝ女ヲ兼ル
天　△熙ゝひゝく　下　ゝたゝく　夫　△夜もすゝ　下　南ゝ無乃ゝ
○出場ヲ寄せて太鼓ゝ地の不より謠出ーて コイアヒヲ
ミテの謠出ーハ別やうゝ謠ふ
乃　△如我昔拡教
ナニ　△ちやくまくゝ色人事
ナニ　△一仏成乃

○猩々乱乃時待囃　相長せんからの時ハ待囃子ふ所心

所不の男ひる

一後乃出端　ふすト不越トみる

囃出し　女ちせ男ちせの系列を板敷のコイアヒトにて

うるふの吹くこまたゆメ合囃ひくだりをもをき出端ふハ

囃ひる仕切乃仏物有へし　色去死左九系系考へし

かゞ爲ちりハ河ろ一セい鈴すこ　を

ちるハ他りちのくうちよ和

他他りあ乃内ちもも呉何ちふく囃ひ出すもを井角

ハ楽爲ぶり出くもあらひ日あなり

○ちや笛　大爲　先ハ笛のヒツカあ

を敷井上て囃出ス

○さゞりえ　ちちう　およもち

を敷井上て囃出ス

一後の出端囃ちてあと　或ハふ　きやと　ワキちちふ不敷の井上ニ

一三字かゝ所後にかハはくけてかろく囃出すへしてを

爲してあと囃ふを勝あれとくきちふすなりす囃

ふ世格ちてニテまもも也ちくとゆちふるひッ付く

かく敷後にうちへし

一相ちを爲す所乃事

十二　△武花の事ひ　ニテ　まさハ開るこのそれみとり　先ヨリ相ちよのゝ所を

○△仏事をすまへれうこ　先ヨリノラズ　あまはみちゝ乃

一年

○ちゝノ席　○席ノ舞　○中ノ舞

○男舞　○神舞　コイアヒ囃出ス　もを井上て出ス也

ワカの出ーハ初何とかくく拍子を風にかろくと扇ひ
後二句三句まくとのすをを吉ん作りむまくのする
を初心なり和なり素扇行ん心持同前
光△さすえとの乃引くル　舞の内地ハをて扇出ス次ヲ
定め何とかくすをト扇出ーて出ーちのすー
江△たくす紅葉せいさいれ地引くル
羽△あるひを引天ばみをとの乃
定△たもかのまひれ引ノルりを風やか
ゆ△ちよくく俄よもう取乃ーて　光平ハ地ハの内へとを
うゝひ出ス
一これの舞ハ三度なり
一かけこ　神楽　ぐ〳〵　カケリ　地ハ高ーて扇出スハ
いつまもろ〳〵

一大たうき　を鼓ようさう上ル
一をとゝを江口ゐと　かをるやとに　裏ヲモ　ワカト云　心をもるゆ
　茅ゐより鼓よゆづり金せんとせばすろくと裕を持
　せて行き省にのき一字をて鼓の拍を拍ーー宿
　の字より省金とすれを結句鼓とくひちふ拍と
一市上のゆり素扇の時ゆるふーを鼓と思をてゆるへーゆ
　ゐれ未長をキワトにあて大鼓乃ハの如く切地へ浸ス
　ーたのそれを同音の出ーをろ〳〵拍と
江△風ハふゆ　ハリニ　ハふすい考と如　長ヲ鼓同音一拍ヨヲ入て出ス
小△笛の考を　ハふ　引をむへき　長ヲ鼓ルト引分て扇出ス
一拍子ハかり風所　鼓ハ拍をて強　扇ハ拍をてつぐ心を拍と

和　△物冷しき山伝に月白の　△物の果やらかり
東　△あるたりろや　ろよおむ三宝　名にを数も知ることを

一きり乃事　　漁父の網を曳ら如しとを

ろ　ぬきそ、いひえおーを拵く拵出を前へ
て抵出す公也一口完切て孤よ切指子と文字の次第
ぬぐをよ伝て拵よ孤乃すて孤と白乃を能
孤へを声も華卦也す一ぢに孤かろくぬと殺も首
をよ孤切よをおちもとヤ事ハず　古書ニ有之
を数す八皆切拵よと
功　△こと一をりれ。風や。いとりんと。をくよ。ろ。ろ。
ろろく。よハ、ハを。

舟　△東方。かろうんせ。南方。ろりを一や。西方。大ぬろく。
北方。こんろう。を一や。北方。中央大重。
○ゑを数おきもきり拵よを孤よを
松　△松よ吹来る。風を。ねして。決ん孤。をけ一孤。
夜すう。まろうの。美よ。みくゆる。おを
変　△ひひ孤ろりを。さ一変一。ろ変ろまは。孤も魂
も。きえくと。おろ赤を。こを伝ゆよ。押入られて。
乙　△かくて。ほひ。立ゆり。ゆく。おやをれちきり。ほきせ
す。ゆきの変と。ゆよろり。きにをろを孤
きをひやうしきゆ拵よにみを孤よ
きゆよろりろを変きりををすや

井角江口角の類ひろ八きりハきゝず指なり

一きりハ返きりむすび不可なく勢あるゝ風ハよろしかるべし

未一くきり八内そぎきりむすべし但縮ハ伝て苧より用ゆ

そゝ熱して左ハ丸舞茎ハ苧るきりハ皆えろなり

楊枝ハ定家 杉垣 姫垣 杉待 後宴 世木もも

一を数事 十四を打内八少あり 巳ス 北より右上ハ九一ツと

右一切二切の例をあけて不拿 隆べく

面一

物ハ饗へ乃条

一縮を大行乃こと

同今様ハ如し 氏

一下まそうたの玉ハ漸ハこと

一又音を沙汰して玉に物花と指べし

剱を去ること乃ゝ後まて包こ 板乃を包ハ如ハ指べし

一おゝ花のごとに細ゝを加て指るゝ如し

一長つゝひゝきハ指るゝ花をもそこゝふゝごとし

一声ハ当ハ丸ゝ乃ゝ如し

一音ハ御女乃条をつむぐゝ如し

ゝ吕ヨリ出てかけきやうト指くゝブム

引てをくたゝみなく

月中よめゝゝ色すして用るハ左ゝに見えゝ

又梅花の如し 氏

ゝ乃川ハ如し 氏

一氣ハ水多ければよく舟を浮ベる如し　上ハゆるくして下ハ沈むあくたなく

一舌ハ扱ひハふくべを多に用ひること

一文字ハ岸ハ水ハ多くあるの如し

同ようまうして障子を引如し　横豎重遠へも不合

一えたらく事ハ筆末ハ如し

一ふしハ能書の手跡乃如し　筆蚤おもくても同し点ハ点ぢ

上下折四ツ八方自由まて筆

去行草ハ点一点もなく続このうち

裕あれくまかん通うの

一白切ハ多嘉乃こと　喉笛竹火吹竹の事　前ニ記

一拍子の味ひハ中ハ紅友とを行の如し　口ニ引ものを

一九曲ハ深谷へうすゐ水ひ有けて風に引かへの如し

一うしハ波乃こと

一御義ハ曲ハ蕎の風になびくの如し　曲舞ハ波ヲの如し　つゑよくゑ

一くどき紅ハみうれたる糸をちくの如し

一キリハ澳父の網を曳の如し

あらたうをあらんよく拾て光へ元生

一数寄者ハ孤ハ落ル川波ハ舟ハ落ル如し

秘古案

花傳書ニ曰謡を教ゆる事ハ先ひいき人乃口つきに成乃

ハ師匠ニなく孤ひいき人を聞きく孤ハ有り其子細ハ

いまと合点ゆるハ師匠ハ稽を耳ハ学ばれを深く

似すなり男ふ人乃ゑく使けふへを師匠乃祇給を
耳に入すふを抜よろへを可をするあぬ拍也
又男ひふ人大ゑを口つきふに使ひ次第くゑ師匠ハ
むきく。男ひふ人ゑこゑく祇ハすゑ拍也男ひふ人ハ祇ハ
乃ゑ一あ一を半入かを一ふゑゑ為なり
一ハ一ハかゑき。かゑ是ハ文字ゑうゑ。曲を心なり、いきも気を
同一和ふ一曲とゑふも同一和なれを祇ハ時ハ男ひやう
別なり稚古ニ曰聲をゑすれて曲ハ古を曲を高を
て調ゑを聖調ゑをわきまえて拍ゑを知れと以ゑを
強ハ男ふ系ゑ文字を学ふ事長後ふゑと拍
ゑゑゑ長次ゑ曲をいゑ風事長後声九を知へ

変長後公稚をゑゑ拍子ハ初中後へ海ゑへきゑ所要なり
一稚古祇ゑれゑ一公男を法ひとすを一
一けいこゑ調ゑゑるく祇ゑぬなり平調ゑふ能のけ
いこなりを双調ハ祇ふ

右花伝書の第一也

けいこをはゑれゑすゑそと異ひ祇一
ゑを祇ハ第九ゑ為ふ為なるへ一
ゑれ乃後ゑ乃稚古祇ゑくなり一
ゑの祇ゑ公ゑゑゑ祇ゑゑ為ゑ

一ゑゑの祇けいこ初ゑり方れ祇ゑゑを行義ゑれハ
ゑきみ生ゑ和なり行義ハ後ゑ変ゑ

一呼吸をいそぐぬやうなをもへ
一其多芳に徒に[illegible]
よく文を[illegible]やうなをきれ[illegible]て八[illegible]のやうに思はれ
心不視ひはしく其次へ[illegible]分かく文句迄も忘れ
やうなぬおもり実践怪りて立きれ[illegible]
[illegible]と徒ひ口に[illegible]はみとおろかより八大分うたひ
らく[illegible]ふ八中くいやなぬ[illegible]を捨て越すと
やて禁古入約要あり[illegible]
[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]と
いやうれ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]角自ふ乃耳へふ入[illegible]

[illegible]ひ[illegible]ても口ハは叶かたきあ[illegible]作事
朱子ノ禁也

一凡事先入為主（フヨリコトセンニヒラフスヒヒト）

[illegible]め耳ハ入[illegible]れを能[illegible]の
[illegible]ハ能事も[illegible]きの[illegible]
て考年すへ

其人れ才[illegible]とひ[illegible]はり[illegible]
[illegible]なるぬけいきうふ[illegible]
我ちの佛[illegible]をもむな
余の[illegible]へも強くなるより
師匠[illegible]きいそ数へな
[illegible]を碎記会此よこへ

一二度ハ云て聞ふへし三度ニ
聞ていひあれ氣ゆ遠りん
をしへすとかめ者ニこの仮名
教訓をせを氣よあり すしく
あれまさ城ニふを和や男ふん
とりねを法はぬれもちこをゆ
方れ写有 者ひとすれとこの内よ
をれこうはぬ乃上ふ部なん

一事ハ修行理の修行とそを事なりを修行して
理を脳煩をれを倫る不有ふ ひさに程ニる和也
又理をうを修行して事を未熟ふてハわさに
かてアて一向うこうぬ和也事と理とハ車れ表裏乃如し
ひぎを能修行してのの上に理を熟得すし即ち
聖人も字而不思則罔思而不学則殆と乃ふ
ニ也して事理一致のる法藝能ふ皆ふことなり

用心信しの第く

一音曲ハ面白ク風情縁ずして孤ふハ悪し疵を考ふ祇
ふ孤ふへし面白きといふハ祇乃事也悪しといふを文
字あつひあり文字おもくて祇抱ふれをきハ孤ふ
ひれ也して中ノ不ハ閑ふく文字ハ粉く祇抱ふに
かてアて稽ふがみち也氏公を極てうたふへし
一稽ふ付ふ向ふ高平に打をお糸をとりて引ふ知ふ

小祝〳〵強く引けたる糸切るよりくひけたるもなり
されすたるまゝ豊ゝ
一よろ藝者よ相よの要事そ而定する事
一初心人乃家より上手の藝をたらん（褒賞）とねゝ
一整古を極め何ても一藝仕る人乃又あるこれ之合余
乃役よ出るすべ〳〵小祝家乃外藝迄深くなる
一酒盛ゝとまて八系も短き祝を用ゆへ
一曲舞論義なとをうたひ事ゝ事
但小祝家と八家計もなくかを又さらり祝を
甲より一つしらり一つ或は席よりもかゝ有へ席よ
くりのゝ世強此和今少もまゝなる有也

一意知小祝をとうゝ意ゝ事を意すへ
一小謡の時一意祝の内ハ乃小祝を謡ふたるハよ又乃小
祝ひをうたふたるこれ世波ヲ之へうひ許ハうたふヲハよ又
一知ゝてけいこの内或は紙ちやゝ高祝そも書内に
湯桶を合又らるくの高ゝを切は火をかゝ之なと
ちるゝを禁む一意くゝれに祝へ
一家抑ふるく元事　要禁ム
ひふきふく延たゝみをゝ知なは
敬うゝ無ふるくゝ知を形
一ますれうる時　義人（イツノタリ）も付声ゝ
同付声ゝるく付ゝ同付声ゝの次ヲ祝〳〵度

一祝ずる

一ニテ字様ノ間候声(ハヒ)ひ鼻み何ても音よ引くす

一同音の時分ハ人乃ゑ(ヱ)をを不中合多位よ祝ス

事ハ乃ハ世祝を耳よ

一句切よ点を略ス

一口をふさぎたるこ

一鼻へ引ぐ

一口先斗を祝ス

一舌ハ巻てうたス

一文字を清ス

目をふさぎ祝ス

一文字ハ長ものやうよ祝ス

一声をふとく細く或はうねる沉ね面白くするやう乃ス

一人をたゝ物やうよ祝ス

一やさしけよ文字を指ス

一思ひの多ス

一返乃ゑ(ヱ)こ於ハ張ス

一祝ふ言ハれを祝ふくス

一辰巳ゑ(ヱ)ハ婦ス又ハ入を祝ふ起キス

一さしハ祝ふ乃ゑ(ヱ)

一音曲よ多ス赤伸(ノブ)ハ赤拍子より多ス

一吹物ハ多ばうたひ多ずず

ますひを多ス

同じくふれて居ス

一ゑやき不字うつりゑやうれを拍子あひ違し　拍子字うつ
はりうけあり
一ひらく不ひらくつもり不民　視生不ヨリ　氏公仕を
一徳義の字をゞめに視ひらけうる不乃　公を拗へしあ
所い不心　張スハ　やうよ有へし
一句切れ字うはりまそ是を言へし　不へ出たるゝ　字
一ミテの視地よりぬやうよ徳ヨ在し
一ワレ後又ワキの徳ミテよなゝぬやうにうゝへし
一四半ノト音比よりぬやうよ公仕へし　拍子を不ヲ方ト前ノ不
字ミヨ付分ちち良ちちにゝを
つよ徳にうはしてもえる

分れうへよ学ゝてゝせいよもあゝし
毎ひにゆたを友よゝへうし
人無城ヨ孫くひちんちうえは
家分乃ゝたゝとなゝと新ゝすや
一何そも藝を自慢するハ学ゝをせゝく所他未塾
なゝ故ゝり　拙藝ゝもに揚ゝてハ上ゝにあり　芸と
そも急ゝ孫を名人乃場よ入るなり他乃藝ゝて
いゝゝゝゝはうを引てハ百安に柳れ葉を対勢と振
てハ向よ敵なく龍を絵ゝてハたちま地雲雨をお
ちゝちひかゝうゝを名人といふありいゝんや洒音
曲乃藝ゝ貴人ゝ信れゝてあゝひゝて神弟の

いさめなども執行すべきなれども其堪能なるをしてハ神明の感応をも得る事武道の妙なり去る依て世俗ハ能乃至他流乃曲節をもてはやし役えを教を教の事まて一とおもはしめ絶も其一門くハ博也も博く見を名人といひむくゝかやうに玄是人を指寄と以ひとつ様に生まつき為かゝらまてを指るべ撰ひの中なりとや伝ふ所を武道乃玉極にうる者ハ先学問をなつ多為儒漢の事を知り神道仏道乃好を明らめ詩歌の道をきせすしてハ不他のとる道一那知ずなり為今日音曲一通りをけいこ

す乳者なと中ゝ武指寄に勧くき筆ハ得ゝき事那れども先武道ハかゝる乃筆のなりと知りて及ばんなりかゝ行くも世通りにんをとゝ指を藝ハ修行よりそうなり然るたわつに音曲をそなひく我を祖の者まて祖なりハ流義を伝へたりなんゝいひ乃しゝ自慢するハ井蛙のゝへなるゝ

上まは中くしてなれと
ゝれなりトへまんしてハ何
慢心と早下すべ伝を打捨く
只何とかくたしなむとよき

夫物ゝ大事秘密とゝ事 神仏佛道奇仏
武藝皆別ゝてハ世申樂ゝ業に多き是ハ
芸藝に深く執心を入させ稽古を積せん為
乃事なり秘すをまゝ毛ゝ如ゝと世話
ゝとゝことく極秘とゝ程如くむつゝ
ゝとゝハかきゝ物なゝ案ゝ事に取あゝゝ事
ゝむつゝ執大事ゝゝ稽ゝも芸術ゝかせ
ゝゝてハゝゝれゝゝ物ゝへさのを秘事ゝハ
せぬゝなり但ゝ申樂ゝ秘すゝ為く

あり或ハを夫方噺ゝ方ゝに別ゝ丁と
合すもを芸流ゝ家傳に付せられく
ゝゝゝ行ゝ事ゝ秘事ゝ定知ゝ迹ゝ事
行ゝ事ゝ秘事ゝゝ芸有芸所の秘
すゝゝ或を異名文字をもらへて
を秘変とゝひ又むゝと今と名ゝ為ゝ
を執すもを是皆秘変を知せまゝ変
相形ゝ又才ゝへ伝ゝ変すゝ秘すゝ一ゝ相傳
乃秘事とく二ゝゝに接へ至すもゝゝ

然るに法外の事ハ多くぬ或ハ家
世書を音曲よりひく佐陽乃理に叶
ひ斜なる急所ハ日比ありし通りの事と
とを書あつめしる者なり

宝暦十二壬午歳六月　今村義福藏板

東都書林　本石町三町目　前川權兵衛
本銀通二町目　近江屋藤兵衛　求板